

## I 糖業の概況

### 1 海外の動向

#### (1) 砂糖類概況

F. オリヒト社が平成 17 年 7 月に発表した世界の砂糖需給によると、03/04 年度（9 月～8 月）の世界の砂糖の生産量は、前年度を 3.1% 下回る 1 億 4,400 万トンとされている。これは、ブラジルで 3 年連続の増産がなされたものの、EU における天候不順、インド、タイ及び中国における干ばつによる減産があったためである。

また、04/05 年度（9 月～8 月）の世界の砂糖の生産量については、前年産を 1% 上回る 1 億 4600 万トンとなる見込みである。これはアジア諸国、特にインド、パキスタン、タイで干ばつによって生産量が減少した一方、EU 諸国での順調な気象に恵まれ単収が増加したことや、ブラジルにおける生産の拡大によって、生産量が増加したためである。

一方消費量についても、前年度より 1.5% 上回る 1 億 4500 万トンが見込まれている。これは北米や EU において食生活の上での嗜好の変化や代替甘味料の利用増加によって消費量が横ばいもしくは微増傾向にある一方、アフリカや南米諸国などで人口増による需要拡大が見込まれるからである。

その結果世界の期末在庫については 180 万トン程度減少し、6600 万トン程度の在庫量となる見込みである。

#### (2) 砂糖の国際価格の推移

2004 年 4 月～2005 年 3 月のニューヨーク現物相場の月平均価格をみると、ほぼ一貫して上昇傾向にある。4 月～5 月は、海上運賃の高騰により現物の需要がタイトになった 3 月の価格状況がそのまま続き、8¢/ポンド<sup>1)</sup>前半で推移した。6 月もブラジルなどの主力生産地の生育状況の不安などから引き続き堅調に推移した。7 月、8 月は投機的なファンド筋及び業者筋の買い注文が入り、9¢/ポンド<sup>1)</sup>を超える展開となった。9 月は 2004/05 年度の供給不足の見通しや、インドの堅調な現物需要を背景に引き続き 9¢ を超える価格展開であった上、10 月以降はファンド筋の投機的な買い及び業者筋の実需買いが入るとともに、2004/05 年度の世界の砂糖需給のタイト感とロシア、インド、中国などの消費国の購入予測からさらに価格は上昇し、12 月以降は平均 10¢ を超える展開となった。

### 2 国内の動向

#### (1) 砂糖類概況

平成 16 年産の甘味資源作物の国内生産は、てん菜については、作付面積は昨年並であったが、全体的に生育に適した天候に恵まれたことから単収が高く、昨年を上回る 465 万 6 千トンとなった。産糖量は史上最高であった昨年を上回る 78 万 6 千トンとなった。

一方、さとうきびは、収穫面積が昨年より減少したことに加え、度重なる台風により折損・潮害などの被害を受けたことなどから、昨年を大きく下回る 118 万 6 千トン、産糖量 12 万 6 千トンとなった。

砂糖の消費は、消費者の低甘味嗜好や砂糖に対する誤解、加糖調製品の輸入増加などを背景として減少が続いているが、砂糖需要の維持・増大に向けたシンポジウムの開催や各種広報媒体を活用した普及啓発活動のための取り組みによって、平成 14 砂糖

年度においては、229万6千トンと、12年振りに前年を0.8%上回ったものの、平成15砂糖年度は対前年2.6%減の223万7千トン、平成16砂糖年度は対前年0.4%減の222万9千トンと減少傾向が続いている。

加糖調製品の輸入状況(16年4月～17年3月)は、「ココア調製品」が対前年2.6%減少したものの、「コーヒー調製品」同22.6%、「粉乳調製品」同6.6%、「調製した豆」同6.4%、「ソルビトール調製品」同4.3%、「その他の調製品(ソルビトール調製品を含まない)同10.7%増加した。この結果、これらの品目全体では、対前年4.7%増の41万3千トンとなった。

異性化糖の移出動向は、第1・四半期の移出数量(標準異性化糖換算)は、4月は前年同期を上回ったが、5月、6月は台風の接近などにより天候が不順だった地域も多く、結果的に前年同期を0.9%下回った。第2・四半期は、昨年 of 冷夏に対し、今夏は記録的な猛暑が続いたことから飲料向けが好調となったため、7月・8月が前年を上回り、前年同期を9.4%上回った。第3・四半期は、10月が秋の長雨や台風の影響等により前年を下回り、11・12月が比較的天候に恵まれ好調であったものの前年同期を0.5%下回った。第4・四半期は、1月が比較的好転に恵まれ前年を上回ったものの、2・3月が低調であったため、前年同期を0.4%下回った。この結果、16年度の移出数量は、前年より2.1%増の79万1千トンとなった。

## (2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場(東京)上白大袋の価格は、16年3月5日に127～130円/kgとなったが、精糖企業の減産の影響から需給が引き締まり、4月に入り下値が3円上昇し、上値と同じ130円/kgとなった。6月23日以降、精糖企業各社が国際粗糖相場の高騰と為替レートの円安傾向による原料輸入コストの上昇を背景として、出荷価格をキログラム当たり2円引き上げたことにより、7月2日に上値132円/kg、6日には下値も同様となった。10月5日、国際粗糖相場の高止まりと原油高による包装資材や国内物流費コスト上昇を受けて134円/kgの上値を付け、11月18日には下値が1円上昇し133～134円/kgとなった。その後同水準で推移していたが、タイの減産、インドやロシアの輸入増加見込みによる国際粗糖相場の上昇を受け、精糖企業各社が2月下旬に打ち出した出荷価格値上げにより17年3月9日に1円上昇し134～135円/kgとなった。

異性化糖の日経相場大口需要家向け(東京・タンクローリーもの)価格は、原料とうもろこしの国際価格の上昇や海上運賃の高騰によるコスト上昇を背景とする異性化糖企業各社のユーザーへの値上げ要請の浸透により、16年4月3日、約6ヵ月ぶりに1kg当たり3円上昇し82～84円/kg(果糖分55%物、中心値)、5月1日に2円上昇し84～86円/kgとなった。さらに8月6日には、原料コストの上昇に加え、記録的な猛暑が飲料冷菓向けの需要急増を背景として2円から5円上昇し86～91円/kgとなり、以降、同水準で推移した。

## (3) 業界の動き

「食料・農業・農村基本計画」(平成12年3月)の方針に基づき、砂糖の自給率の引き上げ、生産コストの低減、消費の拡大等に努力が払われ、目標達成のための取り組みが実施された。

具体的には、国内の甘味資源作物に関しては、安定生産及びコスト低減に向けた土層改良や優良品種の育成、適時・適切な肥培管理の徹底などによる品質・単収向上、

機械化一貫体系の導入、規模拡大のための担い手農家の育成が進められた。

国産糖企業は、製造・流通コストの縮減を図るため、原料受入れ体制の合理化、効率的な製造・流通施設などの整備などが実施された。

精製糖企業は、砂糖の価格競争力の強化を図るため、生産コスト低減に向けて、系列を超えた企業の合併や製糖の共同・委託生産化が実施された。

砂糖の消費拡大を図るため、砂糖消費拡大推進事業として（社）糖業協会、精糖工業会、砂糖を科学する会の主催により、小中高校生等を対象とした「暮らしの中のお砂糖」作品コンクールを実施するとともに、主要都市においてシンポジウムが実施された。また、消費者への直接的情報発信窓口である医師や栄養士などの専門家に対して砂糖の正しい情報を提供し、砂糖に対する誤解を払拭することを目的とした「砂糖科学会議」やパンフレット等を配布するなど、昨年に引き続き積極的に実施された。

また、砂糖の生産・流通に携る 8 団体が自主的に構成する「お砂糖“真”時代」推進協議会の活動は 14 年目を迎え、今年もっとも話題になったお砂糖を使ったデザートを選定・発表が実施された。

#### （４）農林水産省の動き

今後の農政の指針となる新たな食料・農業・農村基本計画が「新たな基本計画に向けた中間論点整理」や、その後の議論を踏まえ、17 年 3 月 25 日に閣議決定された。

この基本計画の見直しの一環として、担い手の経営全体に着目した経営安定対策（品目横断的政策）を 19 年産より導入する方向が示され、新たな経営安定対策への転換に伴う甘味資源作物やでん粉原料用いも生産の支援のあり方など、今後の砂糖及びでん粉に関する制度・施策について幅広い検討を行うため、16 年 8 月より、生産者、関連産業、学識経験者からなる「砂糖及びでん粉に関する検討会」が開催され、月 1 回のペースで検討会及び砂糖分科会が計 9 回開催され、17 年 3 月 31 日の検討会において、今後の砂糖及びでん粉政策の見直しの基本方向がとりまとめられた。

### 3 国内産糖の生産動向

#### (1) てん菜糖

##### ア てん菜の生産

平成 16 年産てん菜の作付面積は前年産比 104ha 増の 67,986ha、栽培農家戸数は前年産比 110 戸減の 10,341 戸、一戸当たりの作付面積は前年産比 0.07ha 増の 6.57ha となった。

北海道平均の ha 当たりの収量は 68.5 トン（前年産 61.3 トン）、総収量も 4,656 千トン（前年産 4,161 千トン）とどちらも史上最高の数値となった。また、根中糖分は 17.2%（前年産 18.0%）と昨年に引き続き高糖分となった。

##### イ てん菜の生育概況

てん菜の植付けは、天候等の影響により、平年より 1 日遅く、最盛期は平年より 1 日遅かった。また、5 月の断続的降雨により各地区で作業が長引いた。

生育初期においては、5 月の降雨により定植後の活着は良好で、気温が 6 月にかけて高めに推移するなど好天に恵まれ、非常に良好な生育となった。

生育中期以降は、7 月下旬から 8 月上旬の猛暑、台風等の降雨、暴風被害による影響も少なく、更に秋の好天により、根部の肥大は特に順調に推移し、根中糖分については、平年並みの蓄積となった。

病害虫については、褐斑病の発生量は少ないながらも全道各地で見られた。また、そう根病の発生が多少目立ち、ヨトウガの発生は少なかった。適期防除の徹底と生育期間を通じて天候が乾燥ぎみであったことにより、全道的には病害虫による被害は少なかった。

##### ウ てん菜糖の生産

16 年産の産糖量は、産糖歩留が 16.87%（前年産 17.89%）と前年を下回ったが、ha 当たりの収量が過去最高となったため 785,510 トン（前年産 744,436 トン）となった。このうち、てん菜原料糖は 308,911 トン（前年産 281,437 トン）で総産糖量に対する割合は 39.3%（前年産 37.8%）となった。

#### (2) 甘しや糖～鹿児島県産～

##### ア さとうきびの生産

16 年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より 338ha(3.4%)減少して 9,547ha となった。

作型別割合では、夏植え 22.5%（前年産 22.4%）、春植え 21.7%（同 21.9%）、株出 55.9%（同 55.7%）となっている。

10 a 当たりの収量は、前年実績より 334 kg（5.9%）減少して 5,308 kg となった。地域別では、種子島地域が 438 kg（7.2%）増加して 6,546 kg、奄美地域が 617 kg（11.3%）減少し 4,857 kg となった。そのため、さとうきびの生産量は前年より 50,893 トン（9.1%）減少して、506,773 トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より 13 戸(0.1%)減少して 10,787 戸となった。

##### イ さとうきびの生育概況

###### ○生育初期（3月～5月）

概ね順調であった。

###### ○生育旺盛期（6月～9月）

梅雨明け以降、降水量が平年の50%前後と少なく、特に与論島と沖永良部では長期にわたる干ばつの影響によって、被害が深刻になった。8月下旬に台風16号、9月上旬に18号と大型台風が相次いで襲来し、南西諸島全域で強風による倒伏、葉の損傷、茎の折損、塩害等の甚大な被害を与えた。

○生育後期（10月～収穫期）

10月中旬に台風23号が奄美地方を直撃し、葉部の裂傷等被害をもたらした。また、収穫期間中は降雨日数が多かったため、全体的に刈取りが遅れるとともに春植作業に支障が生じた。

ウ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より1.32ポイント下回り11.07%、含みつ糖の歩留は前年実績より1.28ポイント上回り12.03%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より13,045トン(19.0%)減少して55,446トン、含みつ糖も前年実績より223トン(44.6%)増加して723トンとなった。

(3) 甘しゅ糖～沖縄県産～

ア さとうきびの生産

16年産のさとうきびの収穫面積は、前年実績より348ha(2.5%)減少して13,611haとなった。地域別では、沖縄地域が138ha、八重山地域が51ha、宮古地域では161ha、前年実績より減少した。

作型別割合では、夏植45.0%(前年産44.4%)、春植12.9%(同12.5%)、株出42.2%(同43.1%)となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より957kg(16.1%)減少して4,988kgとなった。地域別では、沖縄地域が812kg(14.5%)減少し4,788kgとなったが、宮古地域が1,207kg(19.0%)減少し5,158kg、八重山地域も943kg(14.9%)減少し5,378kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より150,877トン(18.2%)減少して、678,967トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は、前年より102戸(0.6%)減少して18,110戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

各地域の3月、4月の月平均気温は概ね平年並み。5月は高く推移したが、降水量はほぼ全域で少なく、特に4月は大東地域で、5月は宮古、八重山地域で平年よりかなり少なかった。

○生育旺盛期（6月～9月）

各地域の月平均気温は、8月は高く推移したが、6月、7月、9月は概ね平年並み。降水量は、6月は与那国で平年並みであったが、それ以外の地域では台風等の影響で平年を上回った。7月は全体としては平年並みであったが、宮古、八重山地方で少なく、特に大東地域で少なかった。8月、9月は台風の接近により、かなり多くの降雨があったが、大東地域では7月、8月、与那国では長期にわたり少雨傾向が続いた。また、期間中に10個の台風が接近し、そのうち台風4号等8つの台風については、倒伏、損傷など大きな被害を与えた。

○生育後期（10月～収穫期）

各地域の月平均気温は、1月は平年並みであったが、全体として高く推移した。

降水量は 11 月と 1 月がかなり少なく、それ以外は平年並み。10 月には台風が相次いで接近し、特に台風 23 号、24 号は、潮害、倒伏、損傷など大きな被害を与えた。

ウ 甘しや糖の生産

分みつ糖の歩留は前年実績より 0.6 ポイント下回り 11.22%、含みつ糖の歩留は前年実績より 0.33 ポイント下回り 13.56%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より 20,856 トン (22.7%) 減少して 71,047 トン、含みつ糖は前年実績より 1,080 トン (14.8%) 減少して 6,229 トンとなった。